

合掌

明るく元気に一生懸命！

先日、日曜の朝の番組「ボクらの時代」というのを観ていました。それに落語の正蔵師匠がでていました。お父さんは有名な三瓶師匠ですね。以前はコブ平といっていましたね。彼が、父である 師匠に弟子入りしてしばらくしたある日、「お前に落語の奥義を教える。」と言われ、いよいよかと、神妙な面持ちで座ると、師匠の口から出た言葉は「落語の真髄は、明るく元気に一生懸命だ。」ということだったそうです。予想だにできなかったその言葉に、さすがにおどろいたそうです。

そんなことを、一緒に出演していた、「わはは本舗」の久本さんと柴田さんに話すと、「小学校の教室に貼っているような言葉だよ。」と言いながら、「でも、そうだよ。どんな時も、明るく元気に一生懸命にやっていたら、どんなことでも乗り越えられる。私たちだって、昔は苦労したけど、いつも、やっぱり、明るく元気に一生懸命にやってきたから、今までやって来られたんだよね。」と言いながら、一緒にたくさんの苦労を乗り越えてきた仲間である、久本さんと柴田さんは、目に涙を浮かべながら言っていました。(たぶんこんな感じの内容でした。)

人間、いろいろあります。ものごとが、思った通りにいかなかったり、何か失敗をしたり、人間関係がうまくいかなかったり…、不安、心配等々。そんなときは、明るい気持ちにならず、元気がなくなることもあります。そんな時こそ、“明るく元気に一生懸命”です。調子のいい時や、嬉しいことがあった時など、自然と笑顔になり、元気も湧いてきます。そんな時は、“明るく元気に”なんて、気にしていなくてもそうなっています。逆に、そんな時は“勝って兜の緒を締めよ”ですね。浮足立たずに、地にしっかりと足をつけて歩むことが大切になるかもしれません。落ち込んでいる時、苦しい時、悲しい時、悩んでいる時こそ、“明るく元気に”しようという教えなのだと思います。落語という厳しい世界では、きっと、自然に笑える時の方が少ないかもしれない。舞台が思うようにいかない、人気が出ない…。そんなことの方が多いのでしょうか。だからこそ、“明るく元気に”という、一見、単純明快に思えることに大きな意味があり、それが大切なのだということなのではないでしょうか。そして、“一生懸命”です。失敗などにくじけず、うまくいっている人を妬まず、ただ、自分にできること、やるべきことを、ただひたすらに、“一生懸命”やるということが大事なのだということなのだろうと思います。

どんなときも、“明るく元気に”そして、自分にできることを“一生懸命”にやること、それこそ、落語の世界で最も大切なことなのですね。そしてそれは、落語界に限らず、人生においても、やはり大切なことなのだと思います。

「人間死ぬまで負けたのではない！」

開祖の法話集を読むと、よくその言葉が出てきます。どんなときにもあきらめず、頑張ること、努力することが大切です。

結手